医学部後援会

副会長　小笠原　範之

元号が「令和」と変わりました。新しい元号と春の息吹が相まって、いやが上にも未来への期待が膨らみます。早々に来年の東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。順天堂大学には、これまで多くのオリンピアンを輩出してきた歴史があり、来年の東京大会でもまた学生、OB・OGの皆さんの活躍を見られるのではと期待しております。

新時代に向かう今、順天堂大学が進めている経営の壮大な構想力とスピード感は、まさしく時流にマッチしており、強い可能性を感じさせます。施設、仕組み、戦略を、ダイナミックに変化させていく順天堂大学のエネルギーには、誰しもが圧倒されるに違いありません。こうした順天堂大学の発展に、少しでも貢献出来るよう、卒業生、大学を応援して行くのが後援会の重要な役割です。

具体的には、毎年卒後10年から15年の、学術研究、診療、地域医療などの活動に顕著な実績のある卒業生を対象に「医学部後援会学術奨励賞」の選考と表彰を行っております。また、昨年の予選会を乗り越えて出場し、今年の箱根駅伝で見事シードに返り咲いた「スポーツ健康科学部･陸上競技部（男子駅伝）への寄付」など､様々な大学活動へのサポートもしております。

さらに昨年度は､単年度の試みとして､順天堂大学の運営する4か所の保育所に備品やおもちゃの購入を目的とする寄付を行いました。医学部のみならず多くの順天堂大学の関係者、さらには地域の方々のお子様も、こうした施設ですくすくと育まれております。私の娘のような乳飲み子を抱えていた女医にとっては、かけがえのない施設で、私の孫も一時大変お世話になりました。

また､この寄付は大学のウェブサイトに掲載されている「使途指定寄付金制度」を活用して、非常にスムーズに実施することができました。そして、年が明けて「このような品々を購入しました」という、お礼のメッセージと写真をいただきました。我々が思っていた以上に、細々としたものも含まれ、その品数と多様さは想像とは違いましたが、子供のみならず、保育士の先生方の笑顔も目に浮かぶようなものばかりでした。写真を拝見して、新時代を生きてゆく世代の子達の一助になればと言う後援会の思いが、伝わったなと感じた次第です。この場をお借りして、後援会と保育所のコミュニケーションの労をお取りくださった、大学関係者の皆様に改めてお礼申し上げます。

後援会からの寄付金で購入された保育所の備品の一部